

アスレティックトレーナーの認知度

阪根ちひろ、高橋正樹、千綿愛実、仲村優花、宮本奈美

【要旨】

アスレティックトレーナー（以下 AT）は、役割を遂行するにあたり、競技者を取り巻く人々や競技者が所属するチームや会社や病院など多くの関係者と接しながら業務を実施していくことになる。日本における AT 有資格者は、高校全国レベルの競技者に対して大きく貢献していると言われている。そこで京都府下にある高等学校でのトレーナーの認知度や現状を把握したいと思いアンケート調査を行った。認知度としては 32%と少なく、トレーナーがいないチームも 86%と多かった。AT を認知していなくてトレーナーがいないチームの認知度向上へ向けて印象を残すことが認知度向上に有効なことだと感じた。つながりを作り、求められている能力を発揮することができれば、トレーナーと言う職業を知ってもらえると共に必要とされ活動できる幅が広がると考えた。

【Keywords】アスレティックトレーナー（AT）、認知度、求められている人材

【背景及び目的】

アスレティックトレーナー（以下 AT）は日本体育協会が認定するスポーツ指導者資格の一つで、¹⁾「スポーツドクターおよびコーチなどと緊密な連携・協力のもと、競技者の健康管理、傷害予防、スポーツ外傷・障害の救急処置、アスレティックリハビリテーション、コンディショニングなど行い、健康で安全にスポーツできるようにサポートする者で、スポーツドクターと共にメディカル・コンディショニングスタッフ」として位置付けされている。日本体育協会公認アスレティックトレーナー連絡会議ではマスタープランが策定された。マスタープランとは、²⁾「運営委員会及び AT 連絡会議での協議、全有資格者を対象としたアンケート調査による実態調査を踏まえ、これからのアスレティックトレーナーの活動の基本方針としてまとめたもの」です。AT は、²⁾「一部のスポーツで国内トップレベルのリーグにおいて登録の義務付けが推奨されているものの、今日のスポーツ界及び一般社会において十分に認知されているとは決して言えない状況にあります。」そこで、私達のような学生トレーナーが今後の活動に生かすために、本研究は、まず京都府下にある高等学校の部活動におけるトレーナーの現状を把握することを目的とした。

【方 法】

京都府下にある高等学校の部活動を担当する教職員を対象にアンケート調査を行った。私立、公立を含む高等学校に電話、訪問で依頼を行い、郵送、訪問でアンケートを配布した。平成 26 年 10 月から調査を開始し 12 月中旬までの回収分は計 534 名（男性 439 名、女性 102 名、無回答 2 名、平均年齢 40.32 歳±11.76、公立 358 名・私立 185 名）、647 チーム（公立 441 チーム・私立 206 チーム）の回答を頂き分析を行った。また、項目によっては無回答を除いて分析を行った。

【結果】

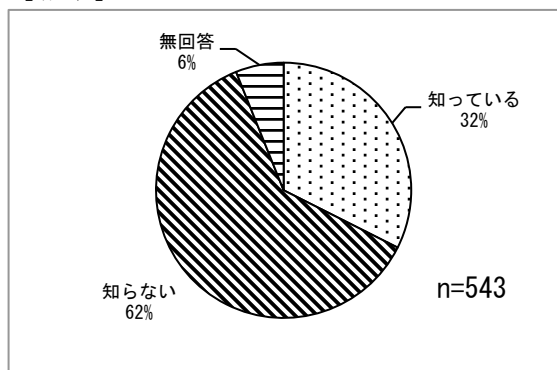


図 1 AT 認知度

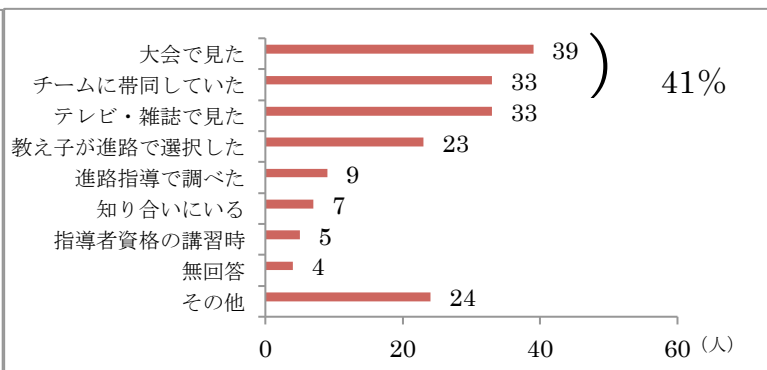


図 2 知ったきっかけ

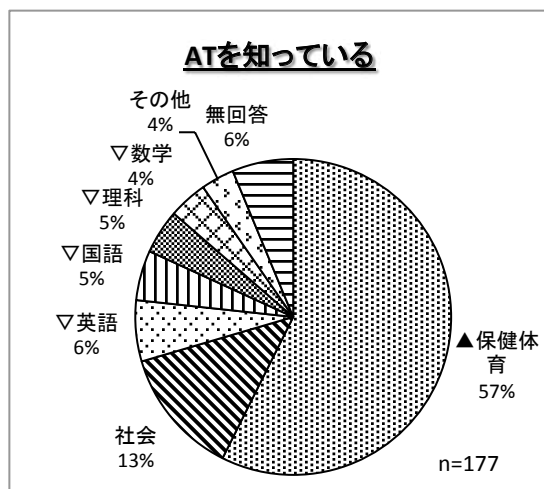


図 3-1 教職員の科目

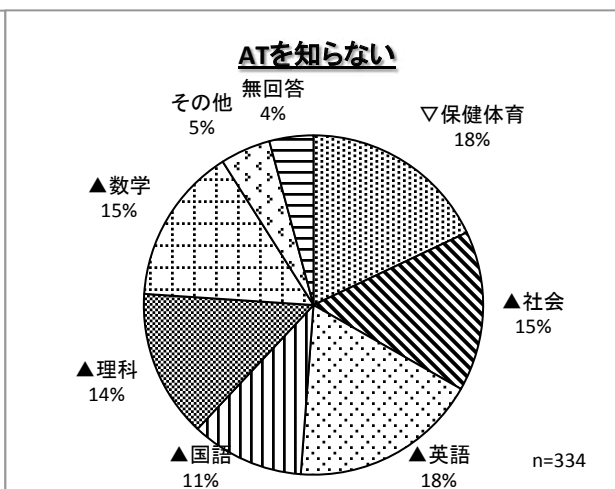


図 3-2

ATを「知らない」が62%。(図1) ATの認知度は高くはないことが分かる。「知っている」32%の人が知ったきっかけは、「大会で見た」や「チームに帯同していた」から実際にトレーナーの活動を見て知ったという人が41%だった。(図2) 教員の担当科目別で見たところ、知っている人の57%が保健体育の教員で、他の科目の教員に比べて認知度が高いことが分かる。(図3)

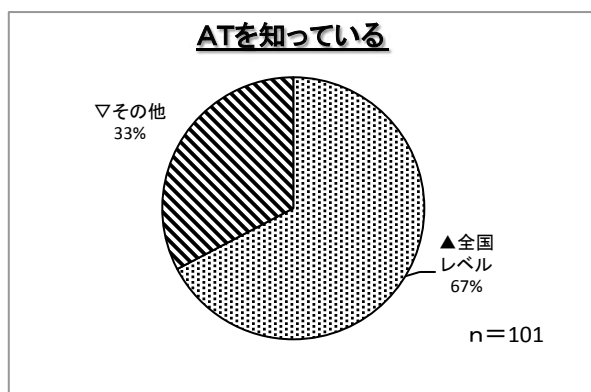


図 4-1 教職員の実績

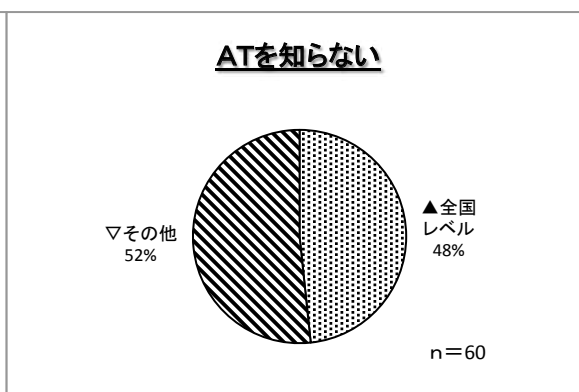


図 4-2

体育教員の競技をしていた頃の実績は、インターハイ、インカレ、国体、国際大会など全国レベルの実績をもっている人、それ以外の人を分けた。ATを知っている全国レベルの体育教員は67%、ATを知らない体育教員は48%、ATを知っている人は全国大会レベルの実績を持つ体育教員に多い。(図4)

トレーナーの現状を「知っている人」の中にはトレーナーがいるチーム、いないチームがあり、違い

を見ていく。二つの違いが分かれば、トレーナーがいるチームと同じ条件を、トレーナーがいないチームに当てはめて見ていき、同条件のチームが何チームあるかを探る。

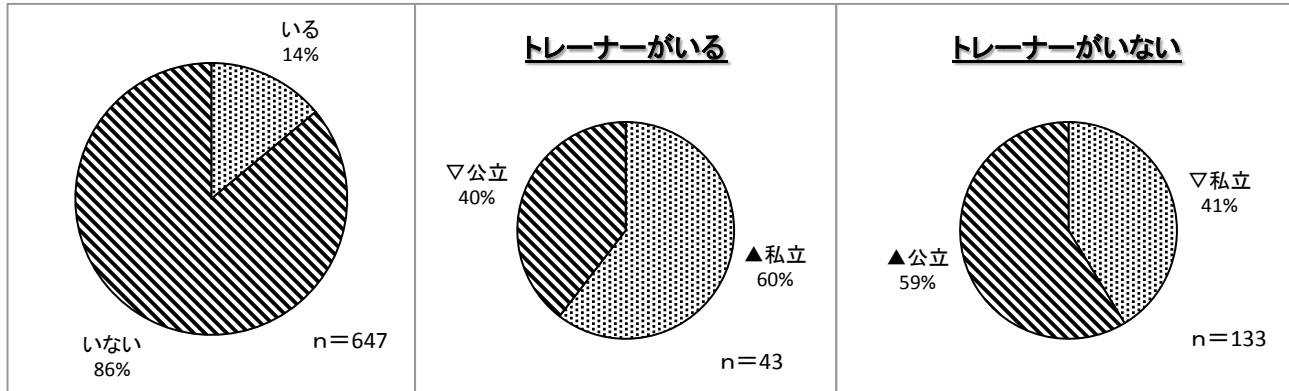


図 5-1 トレーナーの現状 図 5-2 公立・私立別

チームにトレーナーがいるかいないかトレーナーの現状を見て 647 チーム中でトレーナーがいるチームは 90 チーム、14%。トレーナーがいるチームの中で私立は 60%、トレーナーがいないチームは 41%でした。AT を知らないトレーナーがいないチームに私立は 74 チームある。

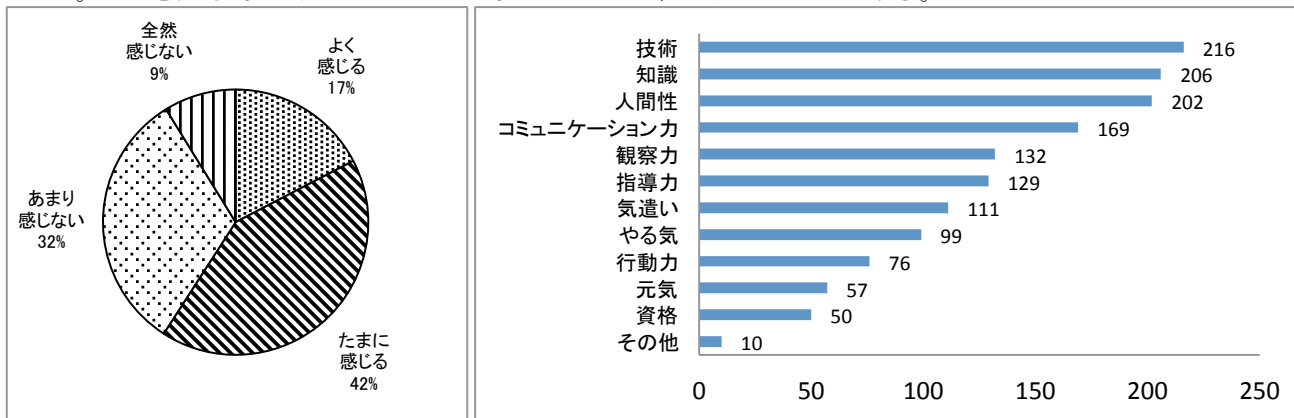


図 6 必要性 図 7 求められている能力

「よく感じる」17%「たまに感じる」42%、必要性を感じている人は技術、知識がある人、人間性、コミュニケーション能力がある人に求めていることが分かる。

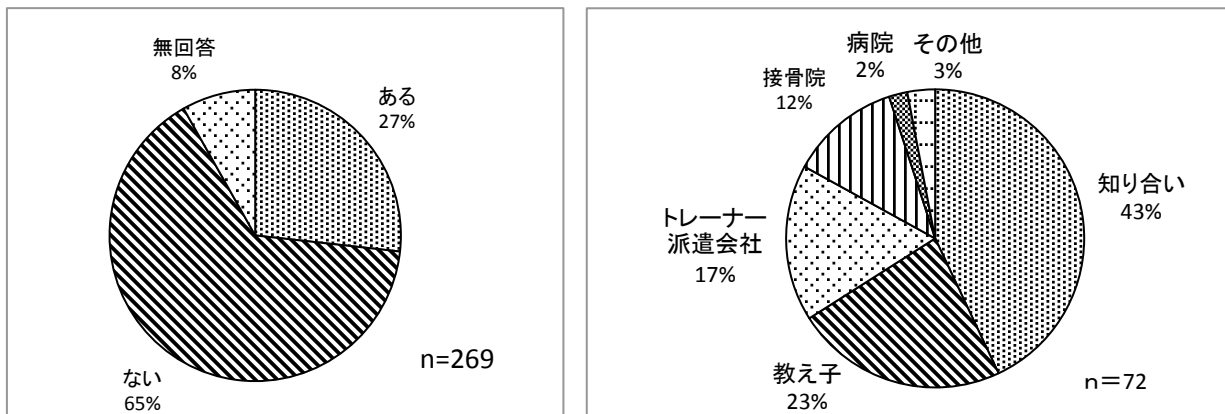


図 8 依頼先があるか 図 9 依頼するなら

トレーナーと契約する際に、依頼するところがある人は 27%、ない人は 65%。(図 8) 依頼先がある人の中で、依頼先は 43%が知り合いに依頼することができ、23%が教え子に依頼することが分かった (図 9)

【考察】

ATの認知度は32%でした。そのうち体育教員の認知が高いことから、体育教員以外の教員の認知を向上しなければならぬと考えた。また、体育教員の中でも本人の競技実績が認知度向上へ向けて、ATを知ったきっかけから、ATを知らない人にATを知ってもらうには、トレーナーとして実際に現場で活動することを強化したいと思った。学校やチームに対して講習会を開くなど指導者や選手と直接会う機会をさらに増やし、印象に残すことが認知度向上に有効なことだと感じた。印象を残すために、私たちができることは、求められた能力の発揮、選手、指導者に対してトレーナーへの関心を持ってもらうことを考えた。学生がATに興味を持ち進路で選択すれば、指導者が知るきっかけとなり認知度向上に繋がると思った。トレーナーがいないチームの59%がトレーナーを必要と感じている。チームにトレーナーが必要と感じている人に契約してもらわなければならないと考えた。チームとトレーナーを契約する際に、身近にいる知り合いや教え子に依頼をすることが分かり、教員の方々と知り合い、つながりを作ることが、トレーナーとしてチームにつくことに繋がると考えた。トレーナーがいるチームは14%だった。いるチームといないチームの違いは私立・公立であることから、いるチームは私立に多く、同じ条件で、トレーナーがいないチームに74チームあった。そのうち13チームがトレーナーの必要性をよく感じており、トレーナーとして契約してもらえる可能性があると考えた。チームにトレーナーとして契約してもらうには、この13チームを対象とし、積極的にアプローチを行いトレーナーの働きかけを行いたいと思います。

【まとめ】

この研究を通じて沢山の指導者と関わることができました。認知度を向上していくには、指導者や選手とのつながり、トレーナーという職業を知ってもらうきっかけを作ることが大事だと思いました。トレーナーとして求められている事は、技術、知識、コミュニケーション力などを発揮できる能力を身に付け、それを、現場で発揮できれば、トレーナーとしての活動の場は広がると考えました。実際に教員の方から「トレーナーの勉強はどんなことをしているのか」「学校で何を学んでいるのか」「卒業後は何をするのか」というトレーナーへの関心があるお話や、「トレーナーをつけるにはどうしたらいいか」「トレーナーがほしい」という相談の声も聞くことができました。今回分析した数値には出ていない中にも、実際に顔を合わせてお話したことで、トレーナーを働きかける対象を把握できました。また、ご協力いただいた、543人の教員にこの研究結果をお渡しする際にも研究結果をもとにしてトレーナーの働きかけを行いたいと考えました。そこで、トレーナーへの理解や関心を持ってもらい、必要性を感じてもらえるようなトレーナー活動を行っていきたいです。この研究で得たつながりを大切にして、今後トレーナー活動を行います。

【謝辞】

アンケートにご協力いただいた京都府下の先生方及び外部コーチの方々ありがとうございました。この研究を元に今後のトレーナー活動に生かしたいと思います。

【参考文献】

- 1) 日体協公認アスレティックトレーナー教本 第一巻 アスレティックトレーナーの役割 p29 2段落目
- 2) 日体協公認アスレティックトレーナー マスタープラン